優秀賞

「の森、凸の家

カナ　トツ

「の森、凸の家

安心して住み続けられるまちを目指すために、浸水より高い土地が広がる市街化区域内部へ住宅地を誘導する。その狙となるのが「『の森』と『凸の家』である。新たに形成された住宅地は、津島市の旧市街地より高い環境性と防災性を備えたものとなる。

「の森

各街区の北西面に「型の防災林を配列する。平常時は、冬季に吹き降りる風から住宅を守り、浸水時には漂流物の拡散を抑えることによって建物の損壊を軽減させる。「『の森』に守られるのは、災害に強い新たな住宅地である。新しい住宅地が造られるにつれ「『の森』は増殖、連続し、津島市の新たな風景となる。

○浸かりにくい土地

計画地とするのは市街化地域の内側に接続する低地である。東部に広がる低地より1.5m地盤が高いことを生かし、さらに1mのかさ上げを行うことで浸水しにくい住宅地をつくる。

○ゆったりとした敷地の住宅地

産業した1区画や空地などの遊休地を活用する。街区ごとに小規模な土地区画整理を行い、敷地がゆったりとした住宅群を再構築する。狭小な既存住宅地と異なる、大きな土地に住める優雅さが大都市と津島市を差別化する。

○防災棟の設置

給食塔、避難棟、救護塔である。一街区方に一棟建てる。階上に物資を備蓄し、（下水の無い街には）地下に共同下水槽を設置する。大洪水時には避難タワーとなる。

○水に流されない

既存水路に接続した、雨水調整池となる遊水池を設ける。敷地内の雨水浸透設備の設置先でもあり、水質を浄化させる仕組みでもある。水辺にはデッキや散策路を配置し、親水性を高めて低地の魅力を最大限に引き出す。

○都市の集約化

駅を中心に住宅街と日常品の物販店を配置し、その外周に大規模商舗、農業地、工業用地を置く。住人が魅力的な歴史資産に触れながら歩いて暮らせるまちを構成し、名古屋近郊の立地を活かして農業への誘い や新産業への門戸を開く。市街地の再構成を図りながら街の力を取り戻す。

凸の家

ゆったりとした敷地を生かした一般的な住宅である。浸水時には2階と屋上が避難場所となる。復興時には、2階で一時的な避難生活ができ、復旧の早い、現代の水屋である。

○1階が浸水しても倒れない家

階段室コアを耐震壁で囲う。パネル化された外壁が水に流されることで、水の力を受ける面積を減らす。吹き通しのピロティ形体になって柳に風の如く、しなやかで粘り強い家を造る。

○2階が水屋

伊勢湾台風級（100年に一度の津波級）でも2階が浸水しない構造をとる。階下に浴室、給湯器、空調室外機等の設備機器と共に、非常時用にミニキッチン、発電機、貯水槽、備蓄物資、救命ボートを置く。

○生活を守る大きな屋根の深い軒

大屋根は1・2階の生活を守る盾の機能をもつ。夏の日射を遮り豪雨の吹き込みを止める。下部の流れ縁は、庭に張り出して風通しがよく気持ちのよい雰囲気を構成する。

○液状化で傾きにくい家

基礎下の地盤は砕石による地盤改良または杭とし液状化に備える。また非常時用の貯水槽を杭頭に対して抵抗する質量とし地盤面下に設けて傾きにくくする。

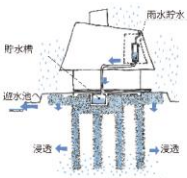
○階段室から屋根へ

1000年に一度の津波に備え、屋上への避難経路を設ける。平常時は採光と新鮮換気の機能を有する。大井のフトコロは資産価値にも活用が可能である。

○浸水後の復興・復旧を支援する

立上りの無い基礎は、汚泥やゴミの掃出し清掃の労力を軽減する。独立柱に仮設の外壁として板・シート状を貼ることで復興面にも役立つ。

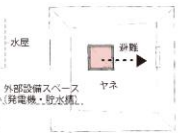
俯瞰図



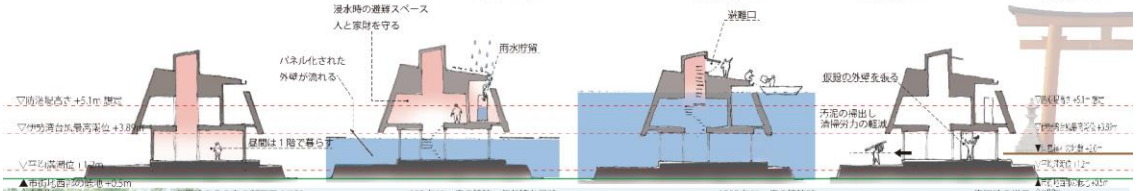
水のダイヤグラム

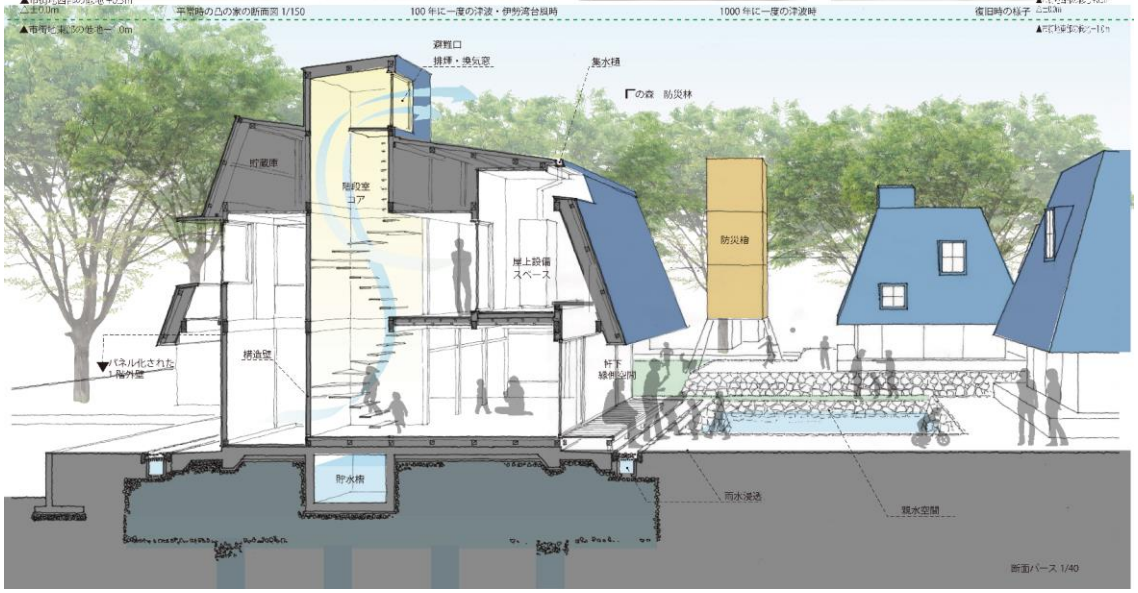
1階平面図 1/150

2階平面図 1/150



屋根伏図 1/150





歴史の背景が深い津島に住み続けるために、安心と魅力のある住まいを提案する。
凸の家は現代の水屋であり、しなやかなで水に逆らわない構造で災害に柔らかく備える。「の森は北西面に防災林を配置し、増殖・連続することにより新しい街並みを形成する。市内において比較的海抜の高い北西地域に住宅を誘導することで、まちの集約と生活の利便性を図る。

（向口武志，吉川代助，奥野美樹，富田崇，謡口志保，山上健）

【審査委員講評】

難波和彦審査委員長

市内の比較的標高の高い 50m 角の畑地を選び、この地域の旧来の大きな屋根と深い軒を持つ農村住宅を参照しながら、水害対策と避難を考慮した集落のモデルを提案している。冬季の北西風を防ぐ「型配置の防風林、盛土した敷地、災害時の生活に対応したコンパクトな平面計画、水害を考慮したパネル式外壁など、多面的な条件を内包したリアリティのある提案である。

朝岡市郎審査委員

遊休地を活用し、都市部とは差別化した新しい街区を構築する案である。凸の家は防災・減災ともに配慮がされている。特に、水害を受けた時に外壁パネルがはずれ、被害の減少、復旧の促進などが図れるなどの提案が高く評価された。

生田京子審査委員

津島の歴史的文脈から様々な空間要素を上手に抽出しつつ、浸水災害の備えに転換しています。比較的リアリティのある対処方法を集約していて、多角的な検討は秀逸です。住宅群が風景の中で、どのように見えてくるのか、佇まい対する更なる配慮や検討がなされると、より魅力的な案となったでしょう。

川崎浩司審査委員

「型の森を設けることにより冬の北西風である伊吹おろしへの対策を施すとともに、10～100 年単位で発生しうる水害への対策だけでなく、1000 年に一度の甚大な災害に対しても対応可能な減災対策を講じた住宅モデルを提案しているところに独創性がある。

清水裕之審査委員

二次審査の説明には迫力があった。防災･減災について、災害の程度における対応提案をきめ細かく行っている点が計画論としては非常に優れている。ただ、残念ながら、デザイン

が計画論の説明となっており、建築やランドスケープデザインとして魅了がない。屋根が審査段階で議論の対象となったが、外部空間のデザインもゾーニングの域を超えておらず、魅了が薄いようにおもう。

日比一昭審査委員

カナの森の機能と増殖性と連続性が、新しい津島の風景になれば環境面でも興味深い提案となる。平均満潮位+1.2m、伊勢湾台風時最高潮位+3.8mラインを明示したのはこの作品だけであり、この点で好感を持った。かさ上げ、防災櫓、避難口など一定の要素は盛り込まれているが、大屋根にすることによる室内空間・環境の制約などこの地域の自然との調和にさらなる工夫が必要と感じたが、全体としてよくまとまった作品であり、実現性も高いと感じた。